

沿線住民の支援で実現した錦川鉄道の 活性化

今、皆さんにごらんいただいておりますのはポスターをそのまま映し出しているものですが、JRグループと山口県でタイアップして、デスティネーションキャンペーンを行いましたときのポスターを、大阪以西、鹿児島までの主要な駅に張ったところがございます。

これは、上から、窓枠のところから写真をとって、対岸から列車をとった写真でございますけれども、この中に錦川清流線の歌というのを入れています。情景を浮かべていただくために読んでみますと、「車窓のこんなに近くにエメラルドグリーン帯が続く、その上を優雅に舞う白鷺やカワセミ、列車は速度を落とし、川の流れに合わせて、ゆっくりゆっくり、その風景を楽しませてくれる、そんな心遣いがうれしい 錦川清流線の旅——」というように、自然と共生している鉄道でございます。



錦川鉄道の概要

当社は昭和62年4月に設立いたしまして、今年で23年目を迎えております。旧国鉄からの転換鉄道であり、資本金は1億2,000万円で、63%を県と市が保有しております。残りの37%につきましては地元企業と地元団体等が21の株主に分かれております。

当社の位置ですが、広島駅から岩国駅まで在来線で来られましたら、その岩国駅から錦町というところまでが当社の線でございます。途中、JR線が絡みますので、JR線から分岐したところが当社の0メートルの起点でありまして、最終的には32.7キロという小さな鉄道会社でございます。岩国から約1時間5分かけて列車が運行しております。運行本数は1日22本です。鉄道事業以外には、市営バスも当社で受託しております。また、遊覧事業としまして、とことトレインという遊覧車をやっており、さらに、岩国駅の駅業務委託も受けております。

錦川鉄道のご利用状況

次に、輸送の状況をご説明します。当社の輸送につきましては、昨年2月に1,000万人の輸送を22年間かけて達成いたしました。沿線は車社会と少子高齢化の加速が進んでおりま

して、鉄道の利用率が非常に低下しております。開業のときには58万人ありましたものが、平成21年度では25万人ということで、最終的に33万人減少、減少率が58%になっております。ここから見ますと、毎年4%ずつ平均で減少していくという非常に厳しい鉄道経営をしております。輸送密度は、開業時には1,000人でしたが、昨年は400人ということで、800人以上で初めて鉄道経営が成り立つという観点からいくと、非常に厳しい経営といえます。今後も一段と少子化や高齢化が進んでくるものがございますので、鉄道だけで経営を好転させることは非常に厳しいこととあります。経営の安定化のためには、鉄道以外の事業を構築していくことが求められております。

錦川鉄道の収入状況

当社の事業収入でございます。輸送量は大きく減少いたしましたけれども、開業から昨年度までの収入は、わずか5%の収入減でした。鉄道事業が当初2億円近くあったものが半分の1億円に減少したものの、逆に関連事業が1億円ぐらいいなりました。トータルで2億円の収入があるんですけども、鉄道事業と関連事業が半々ということになります。

その関連事業でございますけれども、開業時からほとんど変わらない部分と、非常に大きく成長した部分と2通りあります。成長した部分というのが、岩国の市営バスの受託、それから、遊覧車とことこトレイン、さらに、JRの駅の

受託であります。開業時と比べると約8倍ぐらいの収入増になっております。とことこトレインに来られるお客様は年間3万4,000人いらっしゃるんですけども、この遊覧車事業だけで1,000万円近く黒字が出ており、有効な施策になっております。

遊覧車目的で来られるお客様のうちの44%が鉄道を使って来られますので、鉄道需要の誘発効果があります。またお客様は、温泉や食事、土産施設に立ち寄られますので、とことこトレインという遊覧事業で地域全体を潤しているということです。なお、遊覧車の運転手は、地元の定年退職者の再雇用でやっており、こういう面でも地域に貢献している事業であります。

このように、収入は伸びてまいりましたけれども、鉄道は、約1億円の収入を得るのに1億5,000万の経費がかかっております。関連事業で2,000万円黒字が出ておりますので、トータルで3,000万の赤字になっておりますけれども、その鉄道事業自体は赤字の幅が非常に大きいということとありますので、鉄道経営は根本から見直す必要性があります。

この錦川清流線は、市の中心部と市の北部を結ぶ公共交通機関としての役割を持っております。また、錦川清流線の沿線には、錦帯橋という全国的に有名な観光地があり、さらに上流に行けば、自然に恵まれた豊富な観光資源があります。観光交流の拡大と地域の活性化という面で、錦川清流線に大きな期待が寄せられているところでありますし、また、環境負荷につま

しても、鉄道の優位性はゆるぎないものがあります。

このように、錦川清流線の維持存続なくして、交通弱者の足を守り、また多くの人々が行き交う活力あふれた地域を維持することは難しく、地域にとって必要不可欠な社会資本であるということとから、公民一体となって鉄道再生計画を策定いたしました。

新型車両の導入

テーマ 清流と奏でる自然の風景

この鉄道再生計画の中で、今後5年間の具体的な整備計画というものを立てております。具体的には、車両の更新、安全対策、ダイヤ改正など、増収・効率化施策を立て、認定を受けております。

こちらは、鉄道再生計画により導入した4両の新型車両です。平成18年度から20年度の3年間において製作しました。1両が1億2,000万円、4両で4億8,000万円のコストを要しました。鉄道再生計画では、4億8,000万の3分の1を当社が負担すべきでありましたが、全て岩国市に負担をいただきました。製作費の全額が国と県と市の補助金で賄っていただいております。

この新型車両は、地域にとっても非常にうれしい、大変喜ばしいということでありまして、県とか市、地元鉄道業者、官民挙げて車両の製作をいたしました。



当社は、地域にふさわしい車両に、というテーマを設けておりまして、まず、車両デザインのコンペから始めまして、コンペ応募作品を3点に絞り、社内とか市役所とか団体の出先というところに投票用紙を置いて、一番多くの市民の点数をとりましたものがこの4両になっております。

また、ダイヤ改正による効率化ですが、当社は、もともと6両ある車両を、4両に効率化いたしました。そのためダイヤを削減しなければなりません。一部の市民の方からは市議会に嘆願書をいただくとかいうこともありましたが、最終的に市民の大半の方からご理解いただきまして、実施しております。



次に車両の車内ですが、当社は観光で生きようということに大きく方向転換いたしました。

今後も生活路線でご利用なさる方は減少の一途をたどることから考えますと、それを補っていただけなのは観光の方しかないということで、従来の53席の座席を10席少なくして43席にいたしました。椅子の間にゆとりを持たせています。車両の長さも16メートルから18メートルに長くして、長くなった分のところに身体障害者もお使いいただけるような車いす対応のトイレを設置し、テーブルとか大型窓も設置しました。さらに、内装は木目調にし、観光用の車両としてつくっております。

一方、運転席はタッチパネルで最新式のものを入れておりますし、モニターカメラとかコンピューターの制御機器とか音声録音などは最新式のものを導入し、安全性の高い車両にしております。

新型車両のデビュー

こちらは、平成19年3月、新型車両第1号の出発式の風景であります。私が一番よかったですと感じましたのは、久しくさびれておりました駅前で、多くの市民の方に大喜びをさせていただいて、お祝いもしていただいたということになります。



次に、平成20年2月23日に、新型車両の導入を続けていたしまして、導入記念として、どの区間に乗っても1回5円という記念イベントを実施しました。運輸局から「5円でほんとうにもうかるの」と言われましたけれども、宣伝等を入れたら、5円どころではない、大きなものがありました。

最後に、きらめき号の導入ということで、4両がすべて新型車両になったときの写真とポスターであります。3年間かけて、生活路線から観光路線へ大きくかじをとったわけですが、普通旅客収入が少し増加に転じております。こういう観光化の取り組みの成果が大きくあらわれていると思っております。



とことこトレイン

とことこトレインというのをご説明いたします。旧国鉄では、終点の錦町の駅から以北も延長する予定で工事を進めていたのですが、昭和55年に国鉄再建法によって工事を中断いたしました。その後、平成14年まで長い間放置しており、負の遺産ということで、地元では邪魔

者扱いされた鉄道敷、活用のない鉄道敷でございました。

そうした中で、山口きらら博の会場内を運行しているトロッコ遊覧車があったのですが、これを鉄道の走行路に走らせてみたらどうだろうかという地元の案があり、前述の放置されていた未成線の走行路に走らせてみたところ、大ヒットしたわけであります。

車体はテントウムシの絵をかいております。これも住民の方のアンケートでコンペをやりました。一番投票が多かったデザインを採用しています。これを購入した資金は、国の経済危機対策臨時交付金、交付補助金で、岩国市のほうで申請していただきまして、2編成ほど購入しております。



約6キロの区間を、1日に3便、土曜、日曜、祝日、夏休み、春休みというお休みの日だけ、年間140日ぐらいを、時速10キロぐらいでゆっくりと走っております。

輸送人員と書いておりますけれども、つねに3万人以上の方にコンスタントに乗っていただく状況になっておりますが、去年は新しい電動車を導入いたしましたところ、大きく輸送が伸

びてきております。

昭和55年から平成14年まで放置されていた走行路であります、引き取る時に、清算事業団のほうで舗装等をしていただき整備をした上を走っております。ただ、部分的には、まだでこぼこ道があり、がたごとと走りますので、GaTa-kun、GoTo-kunという名前もつけております。

市民協働によるトンネル壁画の制作

こちらがトンネルの中の風景です。とことこトレンは、錦町駅を出発すると長いトンネルに入ります。この長いトンネルは、きらら夢トンネルと名前をつけておりますが、初めはただ長いだけのトンネルでした。現在は、目が覚めるような光景が出現しております。

トンネルの壁に壁画をつくっていただいて、それをブラックライトで照らしているところでございます。この壁画は清流とか蛍とか神楽といった地域の名勝、これは天体をあらわしていますが、生命の起源を描くような壮大な作品ということで、約600メートル続いております。

開業後は溪谷に沿って未成線を走るトロッコというだけで話題を呼びましたけれども、トンネルが多く、トンネルの部分は退屈しますので、対策が必要ということになりました。その時、蛍光石を開発した話がありまして、ブラックライトで赤とか黄、緑、6色に発光するこの石をトンネルに持ち込めないかということで検討しました。地元の小学校、幼稚園、保育園、それ

から一般の方々、また山口芸術短期大学の学生さんに壁画の作成をお願いし、こういうものができております。わずか人口3,800人の小さな町の中で、約15%の人がこれに携わった、小さい人から老人まで一緒になって地元を挙げてこれをつくっていただいたものであります。



これは観光アテンダントでございます。今年の夏休みに、錦川清流線に観光アテンダントを導入しました。今、7名ほどおりますけれども、18歳から51歳まで、いろいろな年齢層の方に私どもの錦川清流線をご案内していただきました。

そういうことで、私どもは常に地元の方々と一緒になって、錦川鉄道を盛り上げながら、地元の財産として守っていただけるということで、鉄道だけ頑張るのではなくて、市の方も頑張っていただけ、県の方も頑張っていただけ、はたまた地元の住民の方も常に錦川鉄道に目を向けていただけるというふうになっております。

当初、6億7,000万でスタートした経営基金が2億円まで減っております。この2億円に減った経営基金で、今後も老朽対策、安全対策、欠損金の補てんというものを行なっていかなければ

ならず、財源が必要でございます。

これが枯渇したときにどうするかということで、岩国市におきましては、地域公共交通会議の法定協議会を立てていただきまして、現在では基金問題もこの法定協議会の中で協議することにしております。ただ、まだ財源が厳しいところでございますので、将来的には、上下分離という方向でやっていただけるものと考えており、私たちも、鉄道の発展のために頑張っているところでございます。

当社は小さな鉄道とはいえながらも、地域から大きく期待されておりますし、私どももこの鉄道というものが今後も未来永劫、維持存続していくということに向けて、一つずつではありますが、小さなことから頑張っていたいて、今後もしっかり成長させていこうと思っております。

— 了 —